

## P-12 千葉県内の犬における市中 *Clostridium difficile* の実態調査

○大坂瑞季<sup>1)</sup> 大島利夫<sup>2)</sup> 佐藤逸郎<sup>3)</sup> 阿部仁美<sup>1)</sup> 小沼 守<sup>1)</sup>

1) 千葉科学大学 危機管理学部 動物危機管理学科

2) 千葉科学大学 危機管理学部 保健医療学科 3) 銚子ハートアニマルクリニック

### 序論

*Clostridium difficile* (CD)は芽胞を形成するグラム陽性偏性嫌気性細菌であり、水辺、土壌、ヒトや動物の腸管・糞便などに広く存在する。*C.difficile* 感染症(*Clostridium difficile* infection ; CDI) は腸管内で毒素を産生した CD によって引き起こされ、発熱や下痢を主症状とする。また、CDI は抗菌薬投与に伴う菌交代の結果として生じる。我々の先行研究において、埼玉県内の動物病院に来院した犬における本菌の保有状況を調査したところ、47.1%で糞便からグルタメートデヒドロゲナーゼ (glutamate dehydrogenase ; GDH) 抗原の存在が確認された<sup>1)</sup>。今回は地域性を明らかにするために、調査地域を変更し、千葉県内の飼育犬を対象に本菌の保有状況を調査し、加えて寄生虫の調査も行った。

### 材料および方法

期間は2020年6-8月で、22検体を収集した(正常便 n=20、下痢便 n=2)。全ての検体に対し、直接イムノクロマト法を用いた検査キットによるスクリーニング検査を実施した。本検査は日水製薬株式会社が製造、販売するクロストリジウムディフィシルキット「GE テスト イムノクロマト- CD GDH / TOX ニッスイ」を使用し、糞便中 GDH 抗原、CD トキシン A/B の検出を調査した。また、動物愛護センターから収集した検体は保護犬で確認のためすべての検体(1-15)、動物病院から収集した検体(16-18)で GDH 抗原陽性だった検体をサイクロセリン・セフォキシチン・マンニトール寒天培地で嫌気培養し、発育したコロニーを用いて検査キットによる同様の試験を行った。加えて虫卵検査については、直接法および浮遊法で虫卵を検出した。

### 結果

正常便の19検体では GDH 抗原、CD トキシンともに陰性で、下痢便2検体と正常便1検体のみ直接法で GDH 抗原陽性、CD トキシン陰性であった。虫卵検査は全て陰性であった。

### 考察

CDI の特徴として春に多いということが示されており、下痢の犬は健康な犬よりも CD 陽性率が5倍以上高かったという報告がある。我々の先行研究においても同様の結果<sup>1)</sup>が得られたが、今回の調査では先行研究と比較して、CD の検出率が低かった。これは、地域性または下痢便の検体が先行研究より少なかったことが原因と考えられる。